『こどもルーブルみたいな美術館展 in 近畿大学医学部附属病院』

しぜんとはたらくくるま

工事現場の真っ白な養生に開いた小さな窓から、子どもたちのイマジネーションの世界を垣間見てください。

この作品は、小児病棟に入院する子どもたちが描いた絵を近畿大学文芸学部の学生が仕上げました。昨年7月に『Hart国際交流プロジェクト－百花繚乱展』として、病院１階売店前に展示した、花をモチーフとした作品から着想を得て展示することとなりました。

テーマは「しぜん」と「はたらくくるま」。工事が始まる前のたくさんの樹々に囲まれていた生命感溢れる自然の景観を想い出して、また、救急災害センターという人の生命を　あずかる最前線施設の工事の様子を入院中の子供たちが色鮮やかに描きました。その原画からインスピレーションを受けた文芸学部芸術学科 造形芸術専攻の学生が協力し、作品に仕上げました。

小児病棟では、8月下旬に入院していた子ども達に絵を描いてもらいました。テーマを聞いて、保育士と絵の具を使って何枚も描き上げる子もいれば、色鉛筆やペンを使ってじっくり描く子もいて、それぞれ個性のある作品になりました。
５階プレイルームの窓からはちょうど工事現場が見えます。そこから見える工事の車を写生する子もいました。また、この夏に何度も降った雷雨の後に見えた虹を想い出して描く子もいました。
この夏に見た花火や、自分の顔、ひまわりや大好きな犬など、思い思いに描きました。

近畿大学医学部－文芸学部連携プロジェクト
院内サービス向上・業務改善委員会